

『軍人靈碑』再建の記

ここ、越中の表徴、立山連峰の一峰浄土山の頂上には、嘗て日露戦争に従軍して、戦死、戦病死された富山県人二千五百九十五柱を合せ祀つた『軍人靈碑』が建立されておりました。

日本で言へば幕末の頃、白人列強の有色人種への侵略の魔手は愈々我国の周辺、東アジアにも及んで来ました。それは今日的見方の「侵略」の善悪とは別次元の当時の世界の潮流だったのです。特にアヘン戦争等により白人列強に蚕食（さんしょく）食べられるやうに）される清国の有様を見た幕末の先人達は、清国の二の舞を踏んではならないと、明治維新を成し遂げ、祖国の尊厳ある獨立を守り通す為に、先進諸国にも学びつつ懸命の努力を重ねました。

東アジアの地図を思ひ浮かべて見ませう。当時も、そして現在只今も、朝鮮半島は正に、日本列島に突き付けられた短刀のやうなものなのです。「北朝鮮によるミサイルや拉致問題」「韓国による竹島占拠問題」等を思へば、朝鮮半島並びにその周辺の情勢が、如何に日本の安全に決定的に重要かよく理解出来ます。

かねてから領土的野望もあり、東アジアにおける不凍港を獲得しようとして東進南下策を採つてみたロシアは、清国の弱体につけ入り、幕末、明治初頭益々満洲（現在、「中国東北部」と称されてゐる地域）での拠点を拡大し、明治二十八年日本が東洋の安定を図つて戦つた日清戦争で得た遼東半島を三国干渉により無理矢理清国に還付させるに至り、我国は国民挙げて「臥薪嘗胆——辛さ、苦しさに耐へ、他日の大成を期す」を合言葉に我慢しました。そしてロシアは清国に迫り各種特権を手中にし、東洋艦隊を旅順、大連に進め、日本から取り上げた遼東半島を自ら租借（そしやく）（他国の領土を借り受ける）し、明治三十三年清国の義和団の乱に便乗して南満洲に大兵力を派兵、乱終結後も撤兵の約を破り、却て明治三十六年には満韓国境に軍を移動、集結させたのです。これは、満洲を略取し、韓国を併呑し、やがて日本をも侵略せんとの野望に他ならないものでした。日本は問題を平和裡に解決しようとロシアと交渉すること十回、その間もロシアは十月には奉天を占領、十一月には軍を遼東半島に進める等、ロシアは交渉を単なる時間稼ぎにしてゐたのであり、我国は已む無く起ち上がる以外に選択肢は無い所まで追ひ詰められたのでした。

明治三十七年二月六日交渉は遂に決裂、日本は東洋の平和と、自国の獨立保持の為決然矛を執つたのです。これが「日露戦争」であり、この時、主として旅順要塞攻略戦、奉天大会戦を戦つたのが、乃木大将指揮下の第三軍であり、その下の第九師団にあつた、歩兵第三十五聯隊こそ我ら富山県人を主体として編成された部隊でした。この戦では第九師団の戦死、戦病死は最多で、中でも「立山隊」の通称まで付けられた第三十五聯隊は第九師団の中でも最多でした。そして戦役後、これら郷土の英靈を鎮魂、顕彰しようとして發願したのが、時の雄山神社司梅野安輝であり、数多の県人の賛同協賛を得て、明治四十二年、当時の第九師団長神尾光臣中将の揮毫になる『軍人靈碑』が建立された次第なのです。

その後長年の風雪により、この忠魂碑の損壊も甚だしく、殆ど忘れ去られようとしておりました。そんな折、富山縣護國神社では嘗て広く行はれてゐた越中男子成年に當つての美俗「立山登拜」の復活を通じての青少年教化善導を願ひ、平成十一年より「元服立山登拜」と銘打つて実施してまゐりました。そして、その登拜に際し、朽ち果てんとする『軍人靈碑』に参拜して関係者一同心中深くその再建を誓つたのでありますが、本年は丁度、大東亜戦争終戦六十周年そして日露戦争戦捷百周年といふ記念の年に方ります。そこで永く先人の偉業を顕彰し、且つ英魂を奉慰すべく、日露戦争のみならず幕末維新の頃より、大東亜戦争に至る全ての戦役における郷土の国事殉難英靈二萬八千六百七十九柱を合せ祀つて再建申し上げたのです。

なほ、この忠魂碑は過去の文献資料や歴史研究等により、この場所に明治四十二年に建立されたことがあきらかであつたため、自然公園法による手続きを行ひ、再建修復されたものであります。

平成十七年八月二十一日

『軍人靈碑』修復実施委員会委員長

富山縣護國神社宮司 梅野守雄